

市芦救援会通信

市芦救援会通信 通巻54号 91/12〈1部100円〉 発行人 玉本 格
市芦救援会 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 TEL 0797(32)1131
市芦反弾圧闘争を支援する会 〒650 神戸市中央区元町通5丁目3の16 テーラビル3F

日程 1月9日 AM10:00～ 小林反对尋問 (市役所東)
2月13日 AM10:00～ " (分庁舎2F)

露骨な組合員排除、市教委役人で増員 文化財係への配転根拠示せぬ小林証人

市芦救援会事務局

一月七日、第三八回公開口頭審理が開かれ、六二年配転の六人のうち、社会科の滝山・小川両先生に関する反对尋問が分銅弁護士により行なわれました。「教科バランスをとった配転」との主張に対し、社会科では二名も削減して時間講師を三名も採用、さらにその翌年には一名を増員した事を追及しました。大巾削減による混乱との追及をかわそうとして、「定数の中で他教科を減らして社会科一名を入れたのは増員ではない」とスリカエ。しかし、深沢先生(理科)を強配してまで市教委の役人を入れた事の本質が、組合員排除であることを自から暴露したにすぎません。

また、滝山先生の配転理由について、「文化財事務繁忙のため」との主張に対して、文化財の発掘調査の増加に対応する調査担当者の配置こそが行政責任として問われていた事実を書証で明らかにしました。配転の公務上の必要性が次々と崩される中で、あせった寺内代理人から「将来の拡充を思って」「理由にはいろんな何がある」などの迷言がとび出す始末。またもや場内の失笑をかっていました。さらに、身分についても五五年には指導主事で配転されたのが、今回は指導員とする降格人事であると追及。配転根拠を何ら立証しえない証言の中で、組合員排除の事実のみが次々と明らかにされていきました。

九一年ももう終りです。反弾圧闘争へのご支援に御礼を申し上げますとともに、来年もよろしくご支援のほどお願いします。

も／く／じ

露骨な組合員排除、市教委役人で増員	市芦救援会事務局	1
第38回公開口頭審理報告		
組合員を削減し、増員は市教委役人で	市芦救援会救援会	2
市芦もゴンチャロフも一つにつながっているんだから負けられない		
ゴンチャロフ労働組合	竹村 務	7

■第三十八回公開口頭審理報告

組合員を削減し、増員は市教委役人で

配転理由は「いろんな何がある」と迷言

市芦救援会事務局

本教員削減しても

講師を入れたからええ

分銅 弁護士（以下、分銅と略）

前回の時間講師の件ですが、社会科で時間講師が必要と把握したのはいつの時点ですか。

小林 証人（以下、小林と略）

四月の初め頃。

分銅 三月二五日に二人の社会科教員（滝山・小川）の異動を前田校長に連絡され、当然、時間講師が必要という校長の話が出たのでは。

小林 出てたかもしれませんね。

分銅 前田校長も、二人の教員の配置がえの内示をうけて、時間講師をお願いしたいと言ったと証言してます。講師の採用について市教委として検討しましたか。

小林 五年も前のことをおぼえてませんよ。傍聴者（以下、傍と略）

人をとばしといて何やその言いぐさは！

小林 結果として時間講師を入れてるんだからそれはそれでええんとちがいますか。

傍 聞き直るな！ 事実経過を言わんか！

正教員をとばしとんやないか！

分銅 時間講師三名を採用したのはいつ頃か。

小林 わすれましたが、四月の初め頃と。

分銅 始業式までには採用されてなかった。

小林 …… 知りません。

分銅 社会科の教師を二名も削減して、その後の授業体制が成り立つように人員を配置することは市教委の義務でしょう。

小林 まあそうですね。

分銅 では、それができたのかできてなかったのか、管理部長の立場として関心もってなかったのですか。

小林 よくおぼえてません。

傍 生徒や学校のこと何も考えてへんのやな。

分銅 三人の講師で一週間をやめた人がいる。

小林 おぼえてません。

傍 ほんまに時間講師やな（笑）

授業は一人一八時間の根拠示せず

分銅 甲第六四号証（六二年度社会科教員持ち時間数一覧表）、正規の三名で、潮海さん

は一九時間持っておられますが、過重な時間数とは市教委として思われないんですか。

小林 …… 過重とは思いません。

分銅 前田校長は過重だと認められましたが、人員配置上、持ち時間の基準はありますか。

小林 …… まあ、一七〜一八時間位と。

分銅 上限が一八時間でなく、標準ですか。

小林 はい。

分銅 他都市も含めて平均一八時間ですか。

小林 ええ。

分銅 調べられたことは？ あなたの思いか。

小林 …… 市教委としては一八時間位だと。

分銅 他都市はよくわからないということか。

小林 総合的に考えて。

分銅 その根拠は。

寺内代理人（以下、寺内と略）

証人が知らない所で決まってる場合もある。

傍 あんたが証人か！

分銅 あなた自身は、なぜ教員の持ち時間が一八時間になっているのか、根拠をご存知ないんですか。

小林 ……

分銅 一八時間が相当と市教委が思ってる根拠は。

小林 私は一八時間だと思ってる。

傍 自分が法やと言うつもりか！

組合員を強配し、指導主事を送りこむ

分銅 六三年度、社会科で正規職員を一名入れたことは記憶してますか。

小林 …… はい。

分銅 村上先生を一名配置されましたね。その理由は。

小林 …… いろいろあったと思います。

分銅 その内容ですが、時間講師ではなく正教員一名を配置したのは、しないと社会科の授業が成立しないということじゃないですか。

小林 いえ、そうではないです。

分銅 ではそれ以外の理由は何ですか。

小林 …… 校長から、社会科を一名ほしいと。

分銅 校長の要望はどういう理由ですか。

小林 …… それは、いろいろあると…。傍 それを聞いとんや！

分銅 あなたの方がバランスをとって二名削減したとおっしゃったが、そうすると授業が成立しないことがはっきりしたので、正教員一名の増員を学校が要求したんじゃないですか。

小林 成り立っていかないというんじゃない。

分銅 市教委として一名増員を認めた。

小林 増員というか…全体が三二名ですの

で、増員とは…。分銅 他の教科で教師が辞めたか、配置がえ

になったんですか。

小林 …… たしか…一名、三月で辞めた。

分銅 配置がえでは。

小林 おぼえてません。

分銅 深沢さんたちを配置がえしたんでは。

小林 ええ、そうですね。

傍 忘れるなよ（笑）

分銅 社会科の教師がどうしても足りないといふと、前年に配置がえしてて、そこで他を削ろうと。小林 増員ではない。他を減らして他を増やすのは。

分銅 どうしても社会科は入れないといかんと、すると定員の関係で他を減らさないといけないと、今度は深沢さんらが出ることになったということですね。

小林 いえ。

分銅 そうおっしゃったでしょう。社会科については必要性を認められたんでしょう。正教員を一名入れたというのは。

小林 …… いえ、いろいろあって…。

分銅 では、村上さんを入れることで、何か管理を強化しようとか、なんか別の理由があったんですか。

小林 申し上げられない。

分銅 社会科の教員を二名削減したことに伴って出てきた弊害があるので一名を増やしてほしいと、それ以外の理由があるんですか。小林 …… よくおぼえておりません。

削減すぎた社会科

でも組合員は戻さず

分銅 村上さんはどこにおられた方ですか。

小林 言う必要はない。

寺内 守秘義務だとは。

審査長 経歴は守秘義務に入るんですか。

△場内騒然、例により証人の頭がブツンしかかり、五分間の休憩▽
分銅 『市教委四〇年史』に、学校教育課主査として載ってますね。

社会科の一名として誰を配置しようかという際、元々市芦で社会科の教員であった小川・滝山そして鈴木先生をという検討はされましたか。

小林 …… いろいろ総合的に…。

傍 そこを具体的に聞いてるんや。

分銅 市芦の先生ら三名についての検討がなかったのか、あったとしたら、なぜ村上さんを入れたのか。

小林 今回の件と関係ないと思いますが。

傍 大ありや！ 何の審理や思とんや！

分銅 本来なら三名をもどしたらいいわけでしょう。にもかかわらず村上さんという指導主事をもどしたのは、何か理由があるからでしょう。

小林 もどすことについては、何も…。

分銅 どういう経過で村上さんが入ったのか。

寺内 それは管理運営事項ですし・・・
審査長 鈴木さん、小川さん、滝山さんの三名について、戻すことも含めて検討されたことがあったのかどうかという点はどうですか。
小林 一応はあった。
審査長 そこで、それを選ばなかった理由は。
小林 いえません。
傍 イヤなんやろ、三人が、はっきり言えばよ。
小林 私は市教委を出てましたのでおぼえてません。

配転理由の公務の必要性を特定しえず

分銅 では滝山さんについて。社会教育文化課文化財係に配置換えされたんですが、理由の一つは、文化財係の業務が多忙になったということと、学芸員の資格をもっているという二つだということですね。
小林 ・・・えっと、そうだったと思います。
分銅 第二四回審理で、「埋蔵文化財関係の発掘調査とかが大変な仕事で、それととくに学芸員の資格を持ってもらえる」とおっしゃってますね。この発掘調査というのは。
小林 発掘調査というてますか・・・
分銅 言ってますよ。
小林 ・・・はじめに言ってますね。(笑)
分銅 何の仕事が文化財係で必要になっていったのか、それを特定していただいて、どんな

要請として文化財係から職員の配置を求められていたのか確定しておきたい。文化財係から増員の要求はあったんですか。
小林 おぼえてませんが、少くとも文化財関係の仕事が忙がしかったことは知ってます。
分銅 現場から増員要求はあったのか。
小林 別に要求があった所だけをするとは・・・
分銅 増員要求はなかったけれど忙がしいであらうと市教委で考えて増員するというのはわかりますし、どちらだったんですか。
小林 あの・・・市職労からも増員の要求が出てて、何年来かの要求でしたし・・・。
分銅 いつ頃からの要求ですか。
小林 えーっと・・・。
分銅 市職労のは、全般的に増員を要求したものでしょう。
小林 ええ。

分銅 何の仕事が忙がしかったのか、発掘調査が忙がしかったのか、それとも埋蔵文化財全般が忙がしかったのか、その点の認識は。
小林 文化財の全般の仕事としては忙がしかった。
分銅 では、文化財係の仕事としては、埋蔵文化財の発掘の問題が仕事の大部分を占めてるんですか。
小林 ・・・。
分銅 どうですか。
小林 ・・・。

分銅 そうなんでしょう。
小林 ・・・。
傍 なんて黙っとんや
小林 よくわかりません。
寺内 先ほどの件、証言後段で、埋蔵文化財の全般の充実をはかる、とある。忙がしいから増員したとれる面と、充実をはかるという抽象的な面とニュアンスが。
傍 主尋問でキチンと聞いてないアンタの責任やないか。アイマイなこと代りに答えるな。
分銅 これから具体的に聞いていくんです。あなたの尋問でもうちよっときちっと聞いときはったらいんですよ。(爆笑)

遺跡発掘調査のために人手がいる

分銅 甲一二四号証(『市教委四〇年史』)の中に、文化財関係の文がでてますね。
小林 みてないです。
傍 部長にはみんな配ってあるやろ。
分銅 仕事が忙がしいというのは、何の関係で忙がしいのか、どう理解されてましたか。
小林 えーっと、・・・建設をするために調査が必要で、その可能性がある所は必ず調査せないかと、ところが業者は早くしてほしいし、そこでのせめぎ合いというか、テンテコまいしてたと聞いてましたし、遺跡を早く調査するために人手がいると、しばしば課長

からきいてた。

分銅 『市教委四〇年史』の本の中に、今いわれたように発掘調査がずっと増加して、埋蔵文化財の調査で忙がしかったんじゃないですか。

小林 いやいや・・・それは・・・

分銅 何かひっかけられると思ってるの。(笑)

小林 いろいろありますし・・・市史の編さんとか・・・

分銅 六二年にしてみましたか。

傍 もう終わったぞ!!

分銅 先ほどの本の中で統計表があり、五八年以降どんどん発掘が増え、六〇年に倍になってますね。それで忙がしかったんでしょう。

小林 ・・・調査に伴って資料整理も・・・

分銅 滝山さんを文化財係に配置させるについて、この発掘調査とあと何ですか。

小林 ・・・。

分銅 きっちり言っておいて下さい。あとでこれもあるといわれたら困りますからね。

小林 文化財係の事務分掌がどうなってるか覚えてませんから。

分銅 では見せましょう。見ればわかるんですね。

小林 えーっ、書いてある通りです。(笑)

将来の充実を思い、配転・増員

小林 遺跡調査で、開発がふえてその対応が大変と、
分銅 人員増をする時は、その業務量がどうなってるのか、一名増員せないかんのかをキチッと把握した上で増員すべきでしょう。
小林 ・・・勿論そうです。

分銅 甲第二七号証二、六二年の事務分担表です、文化財係の。どの業務が増加して滝山さんの配置が必要となったかわかりますか。
小林 ・・・全般的に・・・

傍 全般的にと言うたら人を増やすんか。そんな人事を管理部でしてこんかったやろ!

分銅 この配置の前年、六一年に、文化財保護行政について新聞などで、おそまつ行政と指摘されたことがあるのを記憶してますか。
小林 ・・・おそまつとは・・・。

分銅 甲第二二六号証。一九八六年一〇月二五日付毎日新聞。芦屋市で埋蔵文化財の発掘

調査が急増する中で、調査員、調査担当者が一人しかいないくて、そのため係長が発掘調査したということですませたため、おそまつ行政として県教委からも指摘された。読んだことはありますか。
小林 読んだと思う。

分銅 あなたは全般的に文化財係の仕事が増加したとおっしゃったんですが、遺跡の清掃などありますが、これは従前からあり、増加してませんね。
小林 遺跡調査で、開発がふえてその対応が

分銅 この業務が増大して忙がしくなったから滝山さんを増員したというのか、それとも、拡充を将来的にしていこうということで配置がえされたのか、どっちなんですか。
小林 ・・・いやいや、何回もいうように、いろいろあるわけで、
傍 いろいろの中味を聞いとんや。
寺内 滝山さんをはりつつけることで、他の職員が活動範囲を広げるとか、いろんなながあるんですよ。

配転理由は、いろんなながある

分銅 そう主張してきたやないか!
寺内 将来のことを思って充実させていくというような意味があるんだと。
傍 そんなええかげんなことで行政が人を増やしたことあるんか、業務の特定するやろ!

傍 いろんななにて何や！（騒然）ちゃんと日本語をわかるように言えよ！（爆笑）

寺内 証人の言葉をかりますとね、

傍 お前がかりんでもええ、（爆笑）

寺内 充実という言葉を使っておりましたね、

傍 そしたら、お前が証人になれよ。

審査長 発掘調査の増加というのと、これからの充実というのと、どちらがメインか。

小林 両方あると。（笑） とくに・・・

発掘調査というのは、どのへんまでをいうのか、ちょっと・・・

傍 自分が証言で使ったんやないか（笑）

審査長 あなたが言われる発掘調査とは。

小林 その、土を掘るとかだけでなしに、計画をたてたり、業者と相談したり・・・

学芸資格があれば

文化財係にむいている

分銅 滝山さんについて、昭和五四年にも同じ文化財係に配置がえされたことはご存知でしたね。

小林 はい。

分銅 その時の配置がえの理由は。

小林・・・おぼえてません。

分銅 その理由、また一年で戻った理由について一応理解した上で、今回の配転をされた。小林 ええ。

分銅 当時、開発が増加し、発掘調査に対応

するために、学芸員資格を有する滝山さんに調査をさせるということで配置がえされたと聞いてませんか。

小林・・・それはおぼえてません・・・。

分銅 今回は、少くとも学芸員の資格を有するというのを理由にされてる。その資格があればどうして文化財の仕事がむいているということになるんですか。

小林 ない人よりも当然知識があるし。

分銅 何についてですか。

小林 何について・・・文化財の仕事に適している。

分銅 学芸員の資格があれば発掘調査を担当できるかどうか、ご存知ですか。

小林・・・いえ、よくおぼえてません。

分銅 六二年当時、調査件数がふえてて、それに対応すると。

小林 それは確かですが、発掘だけでカタがつくことでもなく、それに準ずることもある。

分銅 市の職員の中に学芸員という職名は。

小林 いま、おいています。

分銅 滝山さんも学芸員として文化財係に人事異動したんですか。

小林・・・資格がある人が適切と。

指導主事から指導員、でも降格でない

分銅 五五年の時はどういう身分で異動か。

小林・・・えっと、指導主事であったと。

分銅 その五五年の三月に、教育委員会協議会があり、指導員という制度を作りましたね。

小林 はい。

分銅 その四月に滝山さんは指導員ではなく指導主事で異動してる。今回は指導員ですね。この点については検討されましたか。

小林・・・。

分銅 指導員として今回決定したのはどこか。

小林 教育委員会です。

分銅 証人もその会議に入っていましたね。

小林・・・ちょっとわかりません。

傍 人事異動決定に管理部長が入ってないわけないやろ！ そんなところで逃げるなよ

分銅 指導員は指導主事、係長になれないと。

小林 はい。

分銅 前回は指導主事で、今回は指導員で異動というのは降格になるんでは。その検討は。

小林・・・そうとは思ってません。

分銅 指導員は教壇に立った経験がなく、社会教育分野で活動を行うという人でしたね。

小林 そんなことは言っていない。

分銅 市教委協議会でそのように指導員制度を作ったんでしょう。

小林・・・。

分銅 今回、前の異動との身分の関係について検討されたんですね。

小林 任命行為の範囲内です。

市芦もゴンチャロフも一つに

つながってるんだから負けられない

ゴンチャロフ労働組合 竹村 務

市芦救援会の二周年集会で飛び入り発言させていただいた事を今でもよく覚えています。小さな組合で、しかもその仲間の一人が首切りを受けた。そして私はといえば一日中暗い地下室で容器洗いという見せしめの作業に就かされていました。展望もあまり見えない中で、されたしうちのひどさに黙っておれず兵庫県地労委に申し立てた頃でした。

集会に参加しておられた方の拍手の力強さに勇気が湧きました。また、後で私の発言を聞いた方から言葉をかけていただき、「地域で闘う仲間の一つにつながっているな」と暖かい気持ちになったものです。

その後、市芦の先生から、「市芦の教育を受けた卒業生がゴンチャロフに就職して、夢と希望を打ち砕かれて辞めてしまった」と聞き、あらためて自分たちのやっている事の重さに気づかされました。「市芦もゴンチャロフも一つにつながってるんだから負けられない」と思いました。

市芦の教育は一番弱い者の立場に立った教

育だと思えます。そして、その先頭で頑張っておられた九人の先生たちを見せしめにした。しかも、学校で教えることを奪いあちこちばらばらにしてしまった。

私たちも、職場の仲間から隔離され、ある者は階段掃除、ある者は返品炊きというきつい仕事、ある者は暗い地下室で容器の洗浄業務にとばらばらにされました。つい先日職場の人が言いました。「この会社はわしらをまるでぞうきんの様に思っとる。使うだけ使ってボロボロになったらポイと捨てよる」と。

地労委勝利命令を勝ちとる

私たちは市芦をはじめとして地域の闘う皆さんの励ましを受けて、やっと立ち上がる事ができました。そして、三年と四か月目にして組合側勝利の地労委命令をかちとることができました。しかし、この命令はあくまで一つのステップです。嘉村君の解雇の件に関しては、「会社の管理職の態度のうちに反組

合的なものが認められる」とありながら、主文では棄却となっていました。

私の本来業務は（市芦の九人の先生方とよく似ています）については、「不利益取扱いであり、組合に対する支配介入であることが認められ、労働組合法第七条の一と三の違反である」との地労委命令が出ました。この勝利は組合結成七年五か月にしてやっと手に入れた勝利です。

しかし、会社はこの命令文を受け取った三日後に中労委に再審査を申し立てました。そして、組合側も嘉村君の解雇に関して不服として再審査を申し立てました。

今、私たちは、再度、職場の仲間の声にもっと耳を傾ける努力をしなければならないと気づきました。

上部団体にかかわりなく「首切りは絶対に許せん！」「小さな組合でもよく頑張っている」と声をかけてくださり、団体署名は四三六団体集まりました。この励ましがあって私たちはこれまで闘ってこれたのだと思います。多くの職場で交流会を開いていただきました。その時、「私たちに何かできることはないですか？」「もうゴンチャロフの商品買わないとこ」「数は少なくてもみんなの声を代表して会社につづけているんですね」等数多くの激励の声を寄せていただきました。そしてうれしかったのは、はじめて元の職

場に戻った日、「組合が勝ったんやて!」「やっと地下から出てきたな!」こんな風に喜んでくれた職場の仲間がいたことです。

今、結成当初五六名いた組合員のうちまだ会社をやめていない人などの家庭訪問活動を続けています。五年ぶりにやっと話ができて

来年もよろしく

市芦救援会事務局

一月七日の審理に玉本会長が元氣な姿を見せられました。二月に交通事故にあわれ、長い闘病生活をおくられていましたが、「この年で、骨が急にのびてひつつきはじめてなあ、医者もびっくりしとんや」と元氣に話されていました。それからしばらくして、仲間から一冊の詩集が届けられました。『玉本格詩集』(えんぴつの家発行)、扉を開けると、「わたしはわたし自身のために詩を書いていくことに今ごろやっと気づき始めた」とある。

ふと、配転先職場に、昔、玉本先生らが同人誌として発行されていた「鏑」が何冊かあったのを憶い出した。朝鮮戦争の頃の創刊だろうか、ガリ版刷の小さな字に、ほとぼしるほどの情熱がこめられている。一〇号を見ると、「一九五二年元旦の決意を語る」という玉本先生の一文が目に入った。「怒りの

会社への不満をそっと話してくれた人もいます。やっぱり人間、すてたものじゃないです。粘り強く頑張っていけば、市芦もゴンチャロフ労働組合にもきつと勝利の日が来ます。職場の仲間と地域の仲間を信じてこれから頑張っていきたいと思っています。



問題について」として、「この社会に対する抵抗が憎しみでなく怒りとなってとび出して来る」とある。更に「素朴性の再認識のこと」として、「僕たちは、暗雲の渦巻きの真只中に置かれているのである。だから必然、現実に即した詩を書くことになるし、また書かねばならぬ筈である。・・時々情けなくなるの

活動日誌／抜粋／ 1991.11.26～12.10

- 11・26 分会会議
- 30 現代史を考える会。麦の家定例会。
- 12・4 国労・闘争団支援物販実施。
- 5 関西争議交流会定例会。地労協定期大会。
- 7 兵高教阪神支部教研。麦の家運営委。
- 10 日教組第六波秋闘中央動員で上京。

は現実から眼をそらした作品であり・・・」

四〇年前の文章である。読んでみると玉本先生の声として聞こえてくる気がして、また二、三行もどって読み直すのだが、また耳もとで聞こえた気がした。一語一語がとてもハッキリしている。その号には、「手記」として、先生の話の中で時々聞いていた学童疎開での子供の死、八郎の死が書かれていた。

この通信は多分年末に皆様方に届けられると思います。短かい一年だったと、また年の数をかぞえてみる。でも、背のびせず、かがみこむこともなく、じっと目を一直線に見すえようとふんばっている仲間によく出会ってもしました。先日は「元従軍慰安婦の証言を聞く会」に出かけましたが、会場前の右翼のバ声に、金さんの証言は静かにしかし力強く突きささっていました。私たちの心を突きさしてお互いを結びつけあえるような、そんな仲間と、また来年も出会いを持てますように。